

Book等の研究にかゝる諸種の Learning curves と其の形状の類似する事より推して記憶を Retention of Experience なりと定義し、獨り人類等に於てのみならず、廣く生物界、無生物界を通じて行はるゝ一般の現象であるとした。人體が既に一種の化學的物質であつて記憶がかくも一般な現象であるとすれば、Hysteresis に於ける Ewing's Theory の様な器械的説明が、人間の記憶の場合にも可能であるかと思はしめる。

神田氏は記憶の起る原因の二作甲をあげる、其の一は或る化學的變化が腦の物質に生ずるに在り、其の二は其等の間の連絡作用である。

前者に於て氏は先づ Robertsd 教授 (University of California) の學説を紹介した。

氏は記憶を以て何等かの刺激によりて腦裡に生ずる一種の化學的物質なりとし、其場合の化學的變化は大體上 Law of Anticatalytic mono-molecular chemical Reaction 即ち $\frac{dx}{dt} = k_1(a-x)$ に支配せらるゝものとみる。加之此の法則を Ebbinghaus の記憶研究の結果に適用して大差なきを得たと言ふ。

然らば其の化學的物的とは何であるか。R氏は此れに就て明言しては居ないが、神田氏は Reinke 一の他の研究の結果より推して、多分乳酸 $C_3H_7O_2$ 又は炭酸 H_2CO_3 であらうと斷じた。

以上は氏の記憶學説の化學的方面である。こゝに後者の説明は其の物理學的方面を形成する。

諸種の刺激に應じて得た印象——氏は以て乳酸であらうといふ——相互間の連絡はいかにして生ずるであらうか。氏はこれが

就て説く處は、Erner のそれの如く Bahnung によりて抵抗の減少する事であるとす。而し、記憶に關する從來の學説を一括して Voltery なりとして捨て去るであらう神田氏はかくの如き説明によりては満足しない。連絡の甲にあたるものは所謂 association fibre であるとし、更に Bernstein 等の神經纖維の電氣的分極作用説をかり來つて此の作用を説かうとする。

如斯一方に於ては、化學的物質の成生他方に於ては電氣分極状態の變化、かくして成立した經驗の保持は如何にして説明せらるるであらうか。この保持こそは記憶として記憶たらしむる所以の中幹である。然るに氏はたゞ類例を以て是れを説く。曰く、彼の創痕癒えて其痕跡永く存するが如く然りと新陳代謝瞬間も息まざる四に於て、如何にして一定の化學的物質や、一定の電離状態が保存せらるゝのであらうか、吾人は此の點に就ても、的確なる科學的説明を要求してやまぬ。大きな期待を以て其説の發表せらるゝ日を俟つものである。

新 著 紹 介

生物學と哲學との境

東京帝國大學醫科大學教授醫學博士永井潜著。大正五年四月。東京西肆洛陽堂發行。菊版六六二頁。定價三圓八拾錢。

著者右一本を下名に寄せて批評を求められた。然るに時恰も本誌編輯締切の際なりしを以て、之を精讀して本誌本號に愚見を述

ぶるの違なかつた。依て之は巴むなく他日に期することとした。本書は編・章・節等の次序を表はす数字を缺いてゐるが、しかし内容からいへば第一章哲學の新趨勢 第二章哲學なき日本の科學第三章生物學と社會學 第四章生體入造論第五章生物に於ける調和第六章死第七章人類に於ける智識生活の第一歩第八章生理學上より見たる人口問題第九章兩性生活と内分泌第十章精神の身體に及ぼす影響第十一章近代に於ける生物學と哲學との關係を論じ生活現象研究の眞諦に及ぶ等の十一章から成り、更に之を細別して總じて百四十九節から成つてゐる。

著者は「物」とは何ぞ「心」とは何ぞといふ千古の大問題も、自然科學の爲す能はざる所に哲學的思索の助けを喚び來れば之を解決すること出来るといつてゐる。然らば著者の哲學説の如何なるものかなれば、精神的無差別説 (Spiritualistische Identifikation) といふものである。著者は此の純正一元論の立脚地に立てば、千古の大問題も、些の疑もなく忽ち氷解すること出来るといつて、その立脚地から生氣説(Vitalismus)を排し、二元説を駁し、唯物論的一元説を躰け、スピノザ風の並行論を破してゐる。著者の此の論が極めて滔々たるもので、些の凝滞もなく、甚だ明で又甚だ簡である。しかし又それだけ私などには、著者の此の立脚地に對する疑問が次ぎから次と際限もなく湧き起るのである。しかし此等の疑問は前に述べたるが如く私がまだ本書を精讀しないから起る疑問であつて精讀しきへすればすぐにも解かつてしまふのであるかも知れぬが、しかし一讀の上では幾多の疑問を起さずにはゐられなかつた。本書を讀みつゝ感じたことある。それは本書に限つた譯でなく

多くの日本の書物についていふのであるが、兎角日本の書物には印刷上の誤謬が多いのは甚だ以て困つたことである。本書なども校正刷の際十分注意せられたであらうが、それにも拘はず猶數十ヶ處の正誤表が一枚刷にして本に挟まれてゐる。そればかりでない。猶幾多の印刷上の間違ひが一ヶ處あつて、それは附録の正誤表に漏れてゐる。然るに西洋の書物などには、かゝる誤謬は寔に少ない。此點は甚だ遺憾なことである。

次に『索引』のことである。是も本書に限つていふのでなく、本書を紹介する序でいふのであるが、日本の書物に索引のついてゐるのは甚だ稀であるが、是はあつた方が便宜のやうに思ふ。本書の如き浩瀚で入念の作には是非あつて欲しいやうに思はれた。(藤井健治郎)

最近の自然科學

文學士 田 邊 元著

この書の紹介は大體二様に別つてなまざるべきものと思ふ。一章第一章から第五章に至る自然科學説の叙述である。彼は終の二章に於ける現代自然觀の哲學的批判とその認識論的基礎についての著者の見解である。第一の點に關しては、詳しくいふとガリレオニウートンに始まつた近世の機械的自然觀が幾度か裝をかへつゝ最近の新方學的・自然觀に至る自然科學的(物理學的)原理の叙述については吾々はたゞ推服するより外はない。此方面に關する智識の殆んど皆無なる吾々にとつては著者の言ふ所を唯「なる程」と傾聴するより外はない。殊に難解なる多くの参考書をひろく参照してかくまで明晰に組織的に且つ通俗的に(よき意味に於ての)に説